

八 郎 湯

瓜生卓造

講談社刊

はち ちゅう がつた
八 郎 瀧

昭和37年5月20日 第1刷発行

著 者 瓜 生 卓 造
¥ 360 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 株式会社常磐印刷所
(藤沢製本)

発 行 所 東京都文京区 株 式 講 談 社
東 京 3-19
音 町 3
電 話 (03) 大 代 表 3111 会 社

Takuzo Uriu 1962. PRINTED IN JAPAN

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

八

郎

湯

装
幀
北
沢
知
己

一筋の堰堤が、潟の西側にそつて、遠く真一文字に延びていた。コンクリートの側壁が、緩慢な傾斜を見せているのは、潟の地盤の脆弱さを物語るものであろう。堤頂の道には、風に痛められた凍雪が、薄くいじけた姿ではりついている。

矢北周二は、その上にゆつくりと長靴を踏みしめていった。彼は今朝からどことなくしめりがちな胸のうちをもてあましていた。わけもない苛立ちを感じるかと思えば、急に突然の不幸にでも会つたもののように滅入りこんでしまふ。無気力で、空虚で、不安定で、すこしも冴えないで、それでいてつねにあらぬことを期待している——そんなふうにでも説明したらいいのであろうか。しかし、考えてみれば、こんな気持になるのは、ことさら今日にはじまつたことではなさそうであつた。昨日も一昨日も、いや数年来、あるいは生来の宿痾のようなものにも思われた。ただ今日はそれがいつもよりすこし明瞭に意識されていると云うにすぎない。と云

つてべつだんさし迫つた不安があるわけではない。彼は今しがた事務所をあとにして、雪の堤の散策にきたにすぎなかつた。彼は雪と氷に閉ざされた潟の景色がとりわけ好きであつた。

今日も空はストーム・グレーに沈んで、北西の季節風が頬に冷たい。風は間歇的に激しさを増して、大きな雪片を真正面から吹きおくつてきた。

堤の左側には、工事用の送電線が続いている。その電柱の列が、純白の世界に、索漠とした不協和音を奏でていた。

電柱の向こうは一望の雪原。昨秋、この堰堤によつて干拓されたばかりの新しい大地である。堤の延長は三九九〇メートル、潟の西南端一七八ヘクタールの土地が陽光を浴びた。西部干拓と呼ばれていた。

雪原を越して、はるか彼方にはべつたりと雪をつけた寒風山が、冬空に淡い輪郭を見せていた。標高わずか三五五メートルの丘陵だが、長く美しい裾野を曳いて、模型のようなアスピートである。安山岩の山肌には深いひだを刻み、外輪山にかこまれておおらかな隆起を見せる火山の姿などには大山の風格も見える。

右側に目を移せば、潟は目のとどくかぎり雪と氷の世界であつた。沖合には淡い霧が流れて、対岸の丘陵もなく、すべてが漂渺と銀灰色の空にとけこんで、潟のひろがりを見せるものに見せていた。最新の装備を誇る浚渫船も、今は岸につながれたまま、わずかな開水面に寒々

とした倒影を浮かべているばかりである。潟の一切の機能は停止していた。今日は水上に漁どる人影も見えない。

わずかに堤に近く、一条の滯だけが、鮮かな緑色の水面をのぞかせて、ゆつくり南に流れ、突風のたびに無数の銀鱗を踊り立たせていた。

その流れにさからうように、彼は堤頂の道を北へ北へとたどつていった。降雪の合間に、中央干拓の未完成の堰堤がおぼろに望まれる。雪と霧に工事はいつそう遼遠なものに思われた。

八郎潟——この風変りな名前について伝説は語っている。八郎とは天地創造のころ、この地に住んでいた杣の若者の名である。彼は一日山中で潟を覚え、溪川の水を汲むうちに、蛇神に魅せられ、ふと気づいたときには、全神に鱗を生じ、口は耳もとまでさけていた。水に映つたおのれの姿に愕然とした八郎は、雲を呼び、水をおこして、附近一帯を一大大湖となして、その湖底に姿を没した。これが現在の八郎潟である、と云う。対岸には八郎を祭る八龍神社がある。

しかし、地形学は潟を海跡湖と呼んでいる。その名の示すとおり、潟はもと海であつた。現在の潟の東岸はぐつと内陸に入りこみ、そのまま渚となつて、日本海の荒波に洗われていた。中新統、鮮新統をへて、対岸には男鹿島の隆起が続いた。海浸、海退をくりかえしながら、島は東側の浅い海に浅海性の堆積物を盛りあげていった。これに呼応して、米代、雄物の二川は、

周辺に夥しい土砂を運びはじめた。北の米代川の土砂は、南に延びて男鹿島との間に砂洲をつくり、南の雄物川は北に砂嘴を発達させて、おなじように男鹿島へ近づいていった。有史時代に入つたころ、潟は現在の水道を残して外海と遮断された。と同時に、島も東西二十キロ、南北十数キロの蝶形の小半島に生まれかわつた。潟はまぎれもなく海跡湖であり、男鹿半島は陸繋島と呼ばれるべきものであつた。

こうして誕生した潟は、琵琶湖につぐ日本第二の大湖で、周囲八〇キロ、二二一七三ヘクタールの水面を有していた。干拓計画は龐大なもので、東西の承水路と南端の調整池を残して、一七一一七六ヘクタールの湖底をのこらず干上げてしまおうと云うのである。全湖面の七八パーセントに当たり、七〇年、一九五億の予算が計上されていた。世上に話題を呼んだ有明海の干拓が、福岡、佐賀、長崎、熊本の四県にわたる干拓総面積が、四八一〇ヘクタールなのを見て、潟の規模の大きさは容易に想像がつくであらう。

干拓は五つの方面から着手されていた。すなわち東西南北の周辺干拓と中央干拓である。このうち中央干拓は、干拓総面積の九割強を占め、四カ所の周辺干拓は、これに比べれば、いずれも規模の点では問題にならないほど小さかつた。ことに西部はそのうちでも一番小さく、大干拓の小手調べにまづ着工されたのであつた。

潟は干拓のためにあらゆる好条件をそなえていた。第一の魅力は、これほどの大湖でありな

がら、きわめて浅いと云うことである。最大水深は、わずかに四・五メートル、平均三・二メートル、しかもどの沿岸からも四〇〇メートル附近までは、一メートルにも満たない浅瀬が続いていた。第二は、流入河川の流域面積がきわめて小さいことである。潟には二十二の河川が流入していたが、船の通うような川は一つもなかった。米代、雄物の二大河は、土砂の運搬をおえて、今は潟とは無関係に直接日本海に注いでいた。洪水時の調水の関係からおして、湖沼干拓の条件は、流域面積が、目的の湖沼面の五倍以下と云うのが常識だが、潟は三倍にも満たないものであつた。

その外にも好条件が重なつていた。潟は延長三五〇メートルの船越水道によつて日本海と続いており、直接湖面への波浪の影響がなかつた。冬季の強い季節風も、この水道が守つてくれたし、また水道口の干満の差も小さかつた。湖底は平坦で、客土の要もなく、土壌は砂土かローム質の肥沃なものであつた。

ただ湖底の地盤が概して軟弱なことが、唯一つの障害だったが、これも現在の進歩した築堤技術からみれば、一部を除いてそれほど手ごわいものとも思われない。なかで西部干拓は、比較的良好な地盤に恵まれていた。調整池に予定された湖底から土砂を採集し、築堤予定線に積みあげていつて、工事は予定どおり、計画どおりにはかどつた。わずかに堤幅を広く、側壁の傾斜をゆるめることで足りた。これとてあながち地盤の不安定によるものではなく、見

目の優美さと、完成後の道路としての利用価値などが多く考慮されたようで、技術提携をしたオランダ技師の示唆によるものであつた。堤防はアスファルトで仕上げられ、これは日本で最初の試みだが、設計者は大きな自信をもっているようである。堤が築かれてしまえば、あとはポンプ排水を待つばかりで、水深一メートル、一七八ヘクタールの水は、十日あまりで空になつた。予定どおりとは云え、首尾は上乘で、ここが干陸されて、仕事ははじめて軌道にのつた。半信半疑だつた地元の人々も、にわかに積極的な態度を示すようになった。

しかし、周二は逆にそのころから潟の干拓に興味を失なつていつた。潟とかざらず、一般に干拓と云う仕事に、彼は多くの疑問をもつようになった。最近のどことなく浮かない氣持も、あるいはそんなところに原因があるのかもしれないと考えた。

三年前に、彼は大学教師の職を捨てて、自から求めてこの仕事にはいつた。そのときはいかにもさばさばした思ひであつた。しかし、三年の歳月は、予期しない心境の変化をもたらし、特定な事件が契機となつたのではない。河川が土砂を運んで砂洲をつくるように、毎日毎夜目に見えずに積み重ねられていつた感情であつた。

大東亜戦争が、二年目をむかえた年の暮、彼は三ヵ月短縮された大学を卒えた。学窓は兵營に直結し、一兵卒、技術將校、捕虜と云うありきたりの過程をたどつて、二十二年の秋に、フィリッピンから復員した。翌年の春に、某私立大学に職を得た。農業土木の講師として採用

されたのだが、専門の学科にはほとんど関係なく、主として予科の自然科学などを受持たされた。そのうちに学制が変わつて、しばらく附属高校に格下げされたが、一年ほどでまた本校に呼びもどされた。しかし、いぜん専門学科には無関係で、以来十年、教養学部助教授と云う地位に辞めるまで据えおかれた。古い伝統をもつ学校で、校内の派閥関係もやかましく、他所者の彼には決して住み心地の良いところではなかつた。いい加減に嫌気がさしていたころ、今の佐原建設から話があつた。渇の干拓ときかされて、一も二もなく学校を飛び出した。農業土木の技師の多くが、ダム工事を望むのに反して、彼は学生時代から干拓に強い興味を抱いていた。浅い湖沼や干潟などを見れば、干陸したときの状態を想像してみなければ気がすまないと言ふふうであつた。幾多の干拓現場も見歩いて。渇の干拓はこんな彼にうつつけの仕事と云えた。四十にしてはじめて天職をうると云う氣持さえた。そのうえ教師から思うと、給料は二倍にもはねあがつた。やつと人並になれた——正直なところ、彼が第一に抱いた感慨であつた。

入社してしばらくのあいだ、彼は夢中で働いた。一昨年の春には課長のポストを与えられた。彼は呑氣にかまえていたが、はたから見れば、異数の抜擢だつた。学歴、年齢から云えば当然のポストだが、とにかく佐原の人となつてからわずか六ヵ月目のことである。課員は会社に関するかぎり例外なく先輩だつたし、停年を翌年にひかえた係長が、前の席にいた。佐原の

会長と周二の父親とが同郷の友人で、彼の入社も実は老人同志の取引であつた。そんなことをとやかく噂され、ひとときわ風あたりの強いものが感じられた。そう云う周囲の波紋は、彼の控え目な態度で自然とおさまつていつたが、責任者となつて、彼の立場はきわめて厄介なものにかわつた。すべて現場の矢面に立たなければならず、若い役人の強硬不条理な云い分に手を焼くことも再三で、会社はまた利益の追求に急であつた。彼はその間に立つて、さまざまに折衝した。折衝と云うよりは懇願、あるいは瞞着に近いことも多かつた。当然のことだが、彼の役目は、会社がお役所の点数をそこねることがなく、かつすこしでも多くの利益を得るように現場を運営させていくことであつた。彼にはもつとも不得意な役廻りと云わざるを云ない。それに潟の仕事も、実際に当つてみると、彼の夢を満たしてくれるようなものではなかつた。工事は国営で、農林省の指示がなければ、本筋のことはなに一つ勝手に動かすことはできなかつた。請負会社の一技師など、もとより意見らしいものすら吐けない。それやこれやで、仕事への情熱まで失なわれていつたのかもしれない。最近の彼は、しきりと投下された資本と干拓地の効用とのバランスを考えるようになった。そして、考えれば考えるほど懷疑的にならざるをえなかつた。

とは云え、踏みしめていく一歩々々の大地はやはりなつかしく思いかえされた。運搬船で、最初の湖底土の一盛りがここにおかれたときから、彼は工事を見、工事を監督してきた。当然

の感情であつた。雪の下の土も心なしか暖かく感じられる。

こうして歩をすすめていくうちに、霧はしだいに厚く濃く湖面をはつてきて、中央堤をつつみ、今は目のまえの滯まで呑みつくしてしまつた。風と雪も、激しさを増した。彼はいぜん手袋をはめず、フードも背にたらしたまま歩いていつた。寒いと云う感じはなかつた。風雪とたたかうことが、彼の滅入りがちな心をひきたてているようでもあつた。

ポンプ室が左前方に見えてきた。一陣の突風がおそいかかつて、たちまち周囲は白い壁になつた。雪片は砂粒のように頬を打つてきた。彼は風に背を向けて頭をさげ、急いでフードをかぶつた。風は頭上の電線を鳴らし、二度、三度と大波のような起伏をともなつて荒れ狂つた。彼はほとんど両股に顔をうずめこむようにして耐えた。

やつと風をやりすごして、面をあげると、激しい雪降りになつていた。

「矢北さん」

突然、細く澄んだ声が雪をとおしてきた。首をめぐらすと、吹雪のなかに若やいだ女の笑顔があつた。

「悠ちやんじやないか」

と云つて、彼は思わず立ちすくんだ。

「ゆうべ秋田にきました」

露木悠子は落付いて云った。

「誰と？」

「一人で」

「なにか用で」

「あなたのそこへきたのよ」

と、悠子は小さく云つて彼を見上げた。日焼けした顔に、真白い歯がこぼれた。

「僕がきてること知っていた？」

「なんとなくそんな気がしたの。昨日大鰐で敗けたのよ。仕方ない、と思つたけど、ショックだつたわ。ぼんやりしていたら急にあなたのことが思い出されて、つかうかときちやつたの。女の気まぐれかしら……」

「薬でもつかむと云うヤツだろう」

と、彼は溜息まじりに呟いて、悠子と寄りそうように踵をかえした。

悠子は、昨日青森県の大鰐スキー場でおこなわれた選抜アルペン競技に出場した帰りであつた。選手としての彼女の経歴は、札幌の中学時代にはじまり、やがて十五年にもなろうとしていた。年齢の短い女子選手のなかでは超O・Gである。今年二十七になつて、さすがに峠を越していたが、一五三センチの小さな身体は、しなやかに発達した筋肉に恵まれていた。小柄で

あると云うことは、スキー選手にとつて一つの大きな強味とも云えだし、また彼女の外觀を年齢よりも三つも四つも若く見せていた。やや肉の厚い頬のあたりには、まだ二十そこそこの小娘のようなあどけなさも残されている。

「ご用があつたんじやないの」

引きかえしてしまつたことに気がついて、悠子はつと立ちどまつた。

「いいや、堤の上を散歩してただけだ。それに君がせつかくきてくれたんだもの。うまいこと云つて」

と、彼は最後の一言を小さくつけくわえて、首をすぼめてみせた。

「うまいことなんか云わないわ。ほんとうにあなたに会いたくなつたのよ。今朝お電話したらこつちだつて云うんで、すぐきたのよ。事務所へ寄つたら堤防だつて……恋人でもない人をこんなとこまで追いかけてきたのよ。変なこと云わないで」

「有難う。素直にお礼を申し上げよう」

彼はわざと真面目くさつて頭をさげた。

そのあいだにも、つぎつぎと雪煙がすぎていった。風の合間にふと死のような沈黙がやつてくる。そんなとき、瀉はひときわ深く沈んだ色に見わたされた。

「いい景色ね」

「うむ」

「雪の色すてき。山の雪とちがうわ」

「しかし、冬じや見学するにも仕事は休みだし、地層は雪の下だし」

と、彼はどこか投げやりに云つた。

悠子は北大で地質学を専攻し、今も母校の研究室に通つていた。

「そんな勉強家じやないわ。それに私のことずいぶん殺風景な女と思つてらつしやるのね。失礼だわ。私、なんとない旅が好きよ。秋田にもきてみたかつたし、雪の八郎潟も見たかつたわ。よかつたわ。いい景色が見られて……こんな機会でもなければ滅多にこられないところですよ」

「氷下漁でもやつてるとなよかつたが」

「氷下漁も見たいけど、誰もいない氷原の眺めもいいわ。いい職場ね。それにすばらしいお仕事だわ。新しい大地をつくるなんて」

「そうかな。やつてみればつまらんことさ」

彼は横を向いて、ほんとうにつまらなそうに云つた。

「でもいつか男子一生の仕事だつて云つてらしたじやないの」

「冗談じやない。そんなこと云うもんか」